

二年頃と思われ。それは文録三年五月の、衛兵が宗旨  
に与えた二通の知行宛行状でおかる。十ヶ月お前年文録  
二年五月に大友義統が改易され、佐伯惟定が領を棄て亡  
命しているからである。  
(おわり)

随想

城山を想う

東京 片岡 博

当時肺結核といえど、先ず不治ノ疾として恐れられて  
いたものである。私ノ母ノその病氣は、長い間に相当進  
んで悪化していったようであつた。そして霞見馬の寓居で  
殆んど寢たきりになつてしまつた。急に想い出したよう  
に佐伯に帰り度いと書いた。出来れば  
下度父の仕事の方もうまく都合がつかし、出来れば  
何としてでも連れて帰らうということになつた。  
皆で散々知恵を絞つたあげく、結局無理をして客車一  
輛を借り切つた。当時の二等車は通路が広がつたので、  
そのど真中に寢台を据えて、絶対安甯の病人を何とか寢  
せたままで連れて帰ることができたのである。あの頃だ  
からこそ出来たことであつたに違いない。  
寢た才まとはいつても当時の汽車の旅、母はまるで小  
学生の遠足のようにはしむいでいた。そうしてやつと自  
分の生家である山際の土屋家の隣りに落着くことができ

た新日は、ホロホロと涙をこぼしていった。  
幾日か経つと、今度外を見度いと書いた。だが  
何しろ安甯の身であり起き、することは許されない。仕方な  
く寢たままに鏡に映る外の景色を眺められる外はなかつ  
た。それでも裏山の竹林は、い分有つた寂、などとい  
うところをみると、結構何とかして楽しんでたよつであ  
つた。  
その頃の山際といえど、また道にそつてどこまでも続  
く田圃が差つていた。夏の夜などは、聞け放された山麓  
の離れにも、やがましいほどの蛙の鳴声かとびこんでき、  
た。母は、子供の顔を想い出す、というかと思つと、う  
るさくてやり切れないう文句をいつたりした。私はそつ  
と家を出て田圃に石を投げたりこんでゐたが、とても手に  
負えないものではなかつた。知つてあきらめた。  
そうしていつの間にも病氣の分は、ほとんど進んでいつた  
ようである。  
何しろ主治医は母の長兄であつた。オチつとした血  
痰でも出れば、即刻報らせるようばと、哀しく言われてお  
り、いつとも細かく氣を配つて貰つていた。  
とこみか何があると、昼間は何かお辭儀の電話を借り  
ても、用を足せるが、夜分は私が夜番の役目を引き受  
けるよりほかはなかつたのである。  
深夜にでも、私は起こされると必出た。そして全  
く人気がない真夜中の山際の道を通り、三カ丸の前で左  
に曲がつて新道にある叔父の病院まで往復していった。  
武家屋敷特有の大きな門のわきにあるくぐりを抜けて  
外に出ると、私は白塗りの土塀に沿つた道を歩き始める。  
その塀が切れると、黒々としたお城山が右手に浮かんで  
くる。  
満天の星が輝やく夜など、その頂上はまるで手でもと

ごくようにクツキリと近くに見えた。今は病床にある母がすくすくと育つていく子供の顔を、ジツと見守つていてくれたであらうこの山の頂を、私は祈るような気持ちで見上げた。

人の子一人通るでもないこの夜更けの暗い山道の道は、まだ中学生だった頃の私にとっては何となく怖い以外の何物でもなかつた。私は成るべく足音をたてないようにしてそつと歩いた。そのくせ怖いもの見たさで、七折の下に黒黒と口を開いたような山道の奥のぞきこんで見たりして、何とかがカラ元気を吐き出すと努めた。だが、ふと、その大粉の幹に五寸釘を打つという丑の時参りの鼓を想い出して、背筋を走る冷たいものに思はず首をすくめたりするのだった。

その時、遠く峯の松の梢を渡る松籟が、柔かく深夜の静けさをゆきぶり、まるで私に緊張をよそひかしてくれるかのようであつた。私はお城山が見守つていてくれるから怖くはないのだと、一生懸命自分に言い聞かせた。

こうしたお城山との夜の出会い、次第にその回数を重ねていくばかりだった。だから昼間、暇白仲間と一緒にお城山とごろまをひ廻つて遊ぶ時にも、私一人は他の友達と違つた気持ちでお城山に接していたのではあるまいか。

だがやがて、そうして真夜中の峯に祈る必要はなくなつた。母が亡くなつてしまつたからである。帰郷してからも、やつと一年を過ぎた頃だった。

だがその頃には、もうすつかりお城山は私の心の底深く根をちかちかしてしまつていた。

母の死後移つた今の家も山際の一角にある。だが既に今は住む人も無くなつてしまつた。私達も墓参りにしか帰ることを出来なくなつてしまつた友からである。仕方なく

従父姉夫婦はたのんでその空虚の留守を見守つて貰つてゐる。そのお城山の山ふとこゝろに植かれた雑草は、私にどうしてか絶ち難いものがあつたからである。

その我が家の狭い庭の端からも、藁の竹藪越しにお城山の頂の一角が見える。

濃く深い緑に静かな落着きを見せてくれる時があるかと思つと、雨が降りかかると強い陽射しを受けて、眼にしみるように鮮やかな新緑に燃えることもある。四季を通じて、一日を通して、美しく変わつていくそのお城山の表情を、私はそこから喰ひ入るように追ひ求めた。

今でも時偶帰省することがあつて我が家へ近づくと、私は遠くから先ずお城山の姿を探し求める。そして美しくなつかしいその山姿を見つけるとホッとすると、帰つてきたという実感すらあつた。そのお城山に登つてお墓に詣ることだけが、私の佐伯に帰る目的なのかも知れない。

遠く離れていても、私は時々ふとお城山を想つた。霜降りかえつた早朝、薄暗い森の中を縫う細い旧道を登り始める。暗い松木立を過ぎ、藪をくぐつてゆつくり歩く。腰に長刀をたぶさんた人達もこの道を登つていつたであらうかなど、強引昔を思ふ。やがて道は頂上の広場にとび出す。

真事に積み上げられた城壁の石が、もう朝陽を受けて旧さだけがもつ美しい色を見せて輝かしている。私はその城跡に立つて深々と朝の空気を吸ひこむ。そしてそこからの見覚えのあるなつかしい景色を追ひ求める。

遙か遠くに海も、重畳と朝霧の中に浮かぶ周りの山波、怒つてはあつた顔のままでも少しも変わつていない。

さつと病床の母もこの美しい景色を想つたに違いない。

遠く旧い昔から皆が眺め育つてきた姿そのものをかぞへる。それはお城山を中心として造り上げられた、佐伯だけが持つ、十代らしく美しい、絵巻ゆかりである。

ふと足許に遠く、いろいと変わった新しい佐伯があるかに気がつく。佐伯も立派な所になった。それと古い、当り前のことである。日本中が急激に成長し、教しく変貌していくと中には、佐伯だけが昔のままの姿で残つていてほしいなどと嘆息して願わぬ。

唯その中で、佐伯が古いものを捨て、何とかが大切にいつまでも残して置くことを夢見て貰いたいと思つてゐる。

西水田独歩も、

佐伯の春 先づ城山に承なり

佐伯の夏 先づ城山に承なり

秋の夜 月やく城山に承なり

冬はうそ寒き風の音

先づ城山に承なり

城山寂れるとき 佐伯寂れり

城山鳴るとき 佐伯鳴る

佐伯は城山のまの女ははなり

と詠い、

「予が初めて佐伯に入るや、まずこの山に心動き、必ずで佐伯を去るも厭底その景容をぬぐい去るゑたれず、この山なくば余はははとんと佐伯なきなり」とまでいつている。僅か一年足らずの出来いでありながら、お城山は独歩をしてこう言わせているのである。佐伯下育つものか心の寄りどころとしてゐるのか、至極当り前のこととして、良いたゞはるまゝいかに、どうかこの「お城山」をたゞは、いつまでも佐伯人の

題として、昔のままの姿をなぞ姿で残して置いてほしい、と切に願うまゝである。

東京 佐伯市街振興会  
佐伯市出身・賛助会員

記録

お頭様参拜記

佐伯又發 会

会長 高木 嘉吉

去る一月二十五日は、宮崎県東臼杵郡北川所森口の若人クラブの方々に招待され、お頭様参拜の副祭に参列した。お頭様参拜と、休会員と私の三人が、前からの連なりもあり、案内されたのであるが、佐伯史談会の代表として来賓扱いにされ、いささか面食つたわけである。市廂駅で下車して瀬口に向つたが、冬枯れて淋しい風物も、曾遊の地として懐しく、お頭様は温かく一行を迎えた。小野茂会長、徳藤清助副会長等、旧知の方や其の他男女の会員が、いそいそと立ち働いて準備を進めてゐるのは、ほほえましいことであつた。

定刻、延岡の淨満寺の住職の読経で式がはじまつた。大永年蘭(一五二〇年代)より三つと前から、此の地には「空泉寺」があり、代々盲僧が住持として寺を守り、琵琶を弾いて地神経(ヒジんぎょう)を誦じ、仏を祀ると共に民家をまわつて布施を受けていた。  
大永七年(一五二七年)七月二十五日、辰高智の筆で押傘礼成十代の城主佐伯惟治は悲愴な最期を遂げたが、後者